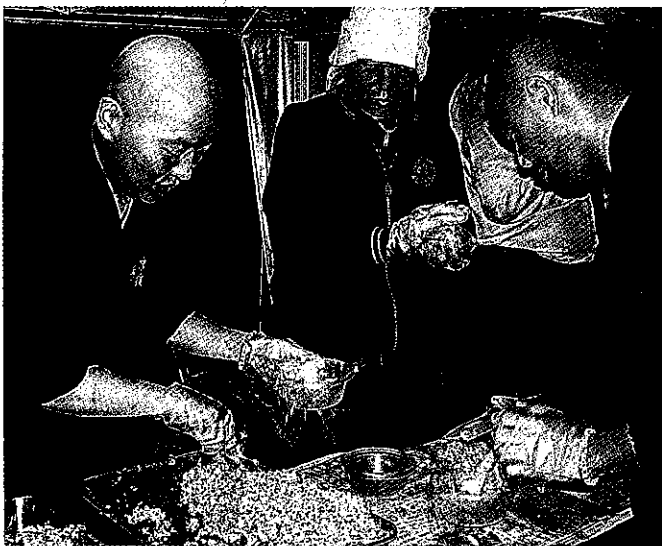


年数千万人分の食糧が破棄さ

れる今こそ仏教界も注目しよう

粗末に捨てら かせるフード

れる食品を生 バンクとは？



ぶれたなどで、売り物にならなくなり、
廃棄されてしまう食品は多い。企業にと
っては社会貢献になる上、廃棄コストの
節約ができ、受け取る側にとっては食費
を浮かせられる分、活動資金をほかに回
せる。お互いにメリットがあるため、対
等の関係が保てるというのも特徴だ。
農林水産省によると日本だけでも一年

フードバンクからのお米を使って炊き出しする「ひとさじの会」

厚生労働省は昨年十月、日本の
相対的貧困率は15・7%に達する
と発表した。六人に一人が貧困状

と話すのもよく分かる。
とはいえ、実際に日本ではどの
ぐらいの人が食べるものに困って
いるのか。大原さんは、国による
正確な統計がなく、把握されてい
ないのが問題だと指摘する。
「日本語には、英語の『hunger』
にあたる言葉がありません。『空
腹』でも『飢餓』でもしっくりき
ません。言葉がないために問題が
見えにくくなっています」

間で、五百万トン、九百万トンの食品が廃棄
されているという。人が命を維持するの
に必要な食糧が年間百八十二万トンとすると、
なんと約五千万人分である。
『フードバンクという挑戦』（岩波書店）
を著したジャーナリストの大原悦子さん
は「フードバンクは、誰かに負担をかけ
ず、みんなが得する活動だと思います」

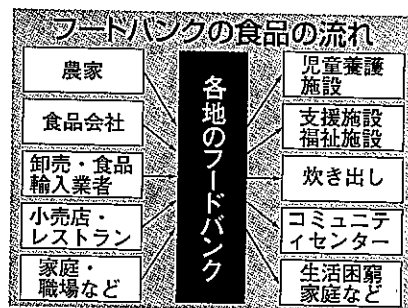
「炊き出しを始めた頃は、フードバンク
からお米を提供してもらっていましたが、
最近はあるがたいことに、全国からお米
を送ってくださる方が増えました。そこ
で、集まったお米を生かすために、お寺
でフードバンクの役割を担えないかと考
え、モデルケースを作ろうと試行錯誤し
ているところだ」と話すのは、「社会
慈業委員会ひとさじの会」の吉水岳彦事
務局長（三十一歳）だ。
同会は昨年四月、浄土宗の若手僧侶が
中心となり結成したボランティア団体。
様々な社会支援活動を行っている。原尚
午会長（三十二歳）も「フードバンクの
存在は活動を通して知りました。もし全
国のお寺で協力できれば、大きな力にな
るのではないかと考えています」と話す。
フードバンクをご存じだろうか。日本

ではまだなじみが薄いのが、アメリカでは
四十年の実績があり、定着している社会
支援活動だという。どのようなものか、
お寺の実践として、意義あるものなのか。
「日本だけで年五千万人分が…」
フードバンクとは、簡単にいうと、食
品会社や生産者などがこれまで廃棄せざ
るを得なかった食品を引き取り、福祉施
設、支援団体など必要としている所に無
償で再分配することである。つまり「余
っているものを困っている人に」という
ごく当たり前の発想による活動なのだ。
もちろん、余っているものといっても、
賞味期限内で、品質にはまったく問題が
ないものだけを流通させる。安全に食べ
られるにもかかわらず、賞味期限が迫っ
たり、ラベルの印字がずれた、外箱がっ

食品会社などが廃棄しようとするまだ十分食べられる食品
を生活困窮者に再分配する社会活動がある。アメリカ生ま
れのフードバンクだ。既に日本でも始まっており、「もった
いない」社会を見直すために仏教界も注目してもらいたい。

態ということになる。またこの十年、厚生労働省の人口動態統計でも、餓死（食糧の不足）は毎年五十人から百人はいる。多くの人が食べ物に困っているのだ。

大原さんは「アメリカではフードバンクと聞くと、『教会のパントリー』を誰もが思い浮かべるようです。パントリーとは食品貯蔵庫のことですが、教会はフードバンクから食料の提供を受け、食べるのに困った人がいつ駆け込んで来てもいいように備蓄しています。こうしたことが全州の教会で根付いています。日本



でもお寺さんが取り組めば、大きな力になるのではないでしょう「か」と提案する。アメリカ

カで最初のフードバンクは、一九六七年アリゾナ州にできた。教会のスーパキッチン（困窮者のための無料食堂）でボランティアをしていた男性がスーパーのゴミ箱に、まだ食べられるのに捨てられている食品があるのを知ったのがきっかけだった。

現在、アメリカには多くのフードバンクの運営主体があるが、なかでも最大の「フィーディング・アメリカ」（イリノイ州）は二百を超える傘下のフードバンクがあり、全米にネットワークがある。年間九十万トンの、三千七百万人に食品を提供しているという。食品提供先の55%が教会などの宗教施設。宗教が困窮者支援に果たしている役割が大きいのが分かる。フードバンクは食品を届けるだけでなく、生活困窮者に調理技術を教えて手に職をつけさせたり、放課後、貧しい家庭の子供が立ち寄って食事ができる食堂を用意したりと、様々な支援を確立している。

日本最初のフードバンクとは

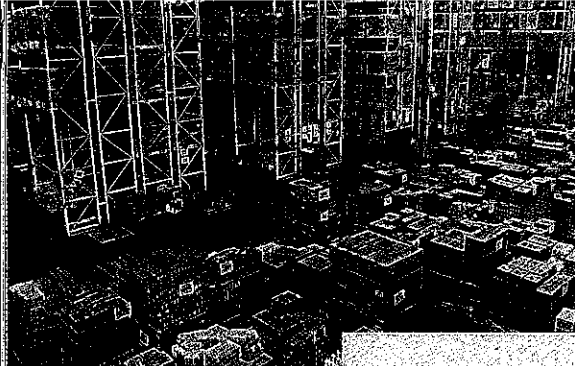
では、最初のフードバンクができて十年が経つ日本は、どのような状況なのか。現在、日本では特定非営利活動法人と任意団体を合わせて、十五団体以上が活動しているといわれる。ここ三年ぐらいで増えた（77頁の表②参照）。

セカンドハーベスト・ジャパン（東京都台東区、以下2日J）は、アメリカ人のチャールズ・マクジルトン理事長（四十六歳）が平成十二年頃から活動を開始した日本初のフードバンクで、規模も最も大きい。現在、食材を提供している企業は約五百社、個人は延べ六百件あり、昨年は五百六十トンの食料を、約五百カ所の福祉施設や団体に配った。

マクジルトン理事長は平成三年、留学生として来日し、山谷地区で野宿者の支援活動に参加した。そこで知ったのは、豊かな日本の貧困。大学卒業後も日本で仕事をしながら、支援活動が続けてきた。

平成十年頃から、日本でもフードバンク活動ができなかつたかと模索。平成十二年に2日Jを設立し、二年後に特定非営利活動法人格も取得した。宗教は一切、関係がないという。

食品は企業と個人の両方から受け入れている。企業の場合、食品の提供を検討している企業から連絡



米国フードバンクの大倉庫

を受けると、スタッフがつまみず、食品の種類や量、賞味



フードバンクからの食品を貧しい人に配る教会

期限などを打ち合わせる。何でも引き取るわけではなく、受け入れを希望する施設がないときは断ることもある。次に、①転売しないこと、②提供先は非課税慈善団体などに限ること、③事故が起った場合は法に従うこと、などを約束した同意書を取り交わす。食品は原則、提供先企業が2日Jの事務所で配送し、各施設には2日Jが配る。2日Jの倉庫は二カ所あるが、支援先まで配送してくれたり、倉庫を提供してくれる企業もある。マクジルトン理事長は、「フードバンクで最も大切なのは、信頼関係。企業とも施設とも、信頼関係がないと成り立ちません。こちらから企業に食品を提供してほしいとお願いに行くことはありません。社会に貢献したいと考えている企業があれば、パートナーになるのです」と話す。

個人で食品を提供したい場合は、賞味期限が明記されているもの、賞味期限が一月以上残っているもの、未開封で袋や箱の破損が激しくないものを受け付けている。お米はいつ収穫されたかを報告する。配送費用は寄贈者が負担する。もちろん、無償提供された食品を無償で配るフードバンクに事業収入はない。そこで、活動はすべて企業や個人からの寄付金で運営されている。平成二十年度は、企業・団体から約五千二百八十万円（七十一件）、個人から約三百七十万円（二百二十二件）、総額約五千六百五十万円の寄付金が寄せられた。

活動は有給スタッフ十三人のほか、週七人ほどのボランティアが支えている。食品の配送や仕分け、上野公園で毎週土曜日に行う炊き出しなどに協力する。

一方、食品の提供先は、児童養護施設、DV被害にあった女性のためのシェルター、路上生活者に炊き出しをする団体など様々だが、非営利活動をしている慈善

団体に限っている。やはり信頼関係を重視し、福祉施設や団体から食品の提供を依頼された場合、賞味期限内に適切に使用することなどを説明し、同意を得てから届ける。

七万カ寺の1%が参加すれば

2HJが食品を届けるのは基本的に施設や団体だが、「ハーベスト・パントリー」として、個人宅にも月二回二十キロほどの食品をバックして送っている。難民認定を申請中の人や景気の悪化で失業した日系人家庭などが中心だ。緊急的な支援のため、三ヶ月を限度としているが、継続して必要とする人も多い。そういう場合は、2HJの事務所まで、直接取りにきてもらうことになるが、遠方だったり、病気がったりすると大変だ。

「今、日本で貧困により十分に食事が取れない人は約七十五万人もいます。そのうちハーベスト・パントリーで救えるのは、せいぜい月に八十世帯ほど。個人に



スーパーから届いた食品を仕分けする2HJのボランティア

宅配するのはお金がかかりすぎ、効果的な支援方法ではありません。ですが、実際は多くの母子家庭や高齢者世帯が支援を必要としています。そこで、お寺さんの力を貸していただけないでしょうか。2HJから各地のお寺に食品を送り、再分配してもらえば助かります。全国にお寺は七万カ寺あると聞きますが、そのうち1%の七千カ寺が十世帯に配るのに

協力してくれるだけで、七千世帯を助けられます」

実は、マクジルトン理事長はこの十年、お寺や教会に困窮者のために食料を備蓄してほしいと呼び掛けてきたが、協力は得られなかったそう。だ。知らない人が急に駆け込んでくるのではないかと、不安の声が多いという。だが、こう話す。「二十四時間、門を開けておく必要はありません。できることだけいいのです。交番と同じで、普段は利用しなくても、本当に困ったときはお寺に食べ物をもらいに行けるというだけで、安心して暮らせます。大切なのは満腹にすることではなく、社会から孤立している人が、見捨てられていないと思えることではないでしょうか。私たちは食品の提供はできても、心のケアまではできません。そこをお坊さんに担っていただけたらと思うのです。何ができるか一緒に考えませんか」

お寺に食料を備蓄したり地域に分配するのが難しくても、個人的に食料を送る

るかもしれない。

次に、実際にフードバンクに協力したり、すでにフードバンクのような活動をしているお寺の実践を紹介しよう。

お寺でモデルケースを模索中 浄土宗・ひとさじの会

冒頭のひとさじの会の活動の一つに、昨年八月に始めた東京・山谷地区での炊き出しと夜回りがある。会員は現在、僧侶を中心に三十人。毎月第一、第三月曜日の夕方、同会の僧侶やボランティアが、山谷にある浄土宗光照院（台東区清川）に集まる。

境内にテントを設営し、十七分分のご飯を炊き、ふりかけやゴマなどで味付けし、一合ぐらいの大きいおむすびをむすぶ。約二百個ができると、夜八時、本尊の阿弥陀如来に手を合わせてから、出発。山谷や浅草周辺を歩き、路上に寝たり、坐り込んだりしてい

る人がいると、「おかげんはいかがですか？」と声を掛け、おむすびを一つずつ渡していく。なかには身の上話をしてくる人もある。このおむすびがその日の一食目という人も少なくないそうだから現実には厳しい。

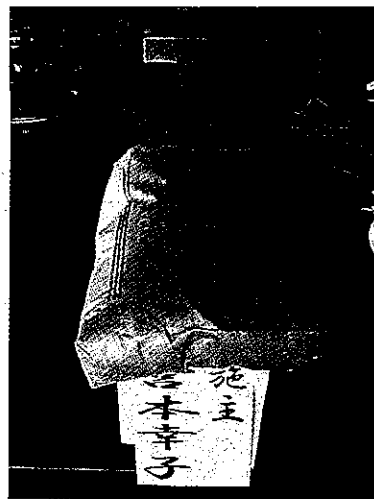
「私たちの活動は「ひとさじ」という名前にもあるように、大きいものではないありません。できる範囲で困っている方に寄り添っていきたいという考えです」と、吉水事務局長。

また、新宿や池袋ではかの団体と協力して炊き出しをしたり、身寄りのない人の葬送支援なども行う。会員の多くが僧侶だから、自坊の法務の合間を見つけて駆けつけているのだ。

同会の炊き出しは当初は、フードバンクの一つ「フードバンク」（東京都荒川区）からお米の支援を受けて行っていたが、しだいに全国からお米が寄せられようになり、最近では備蓄もできる状況になった。そこで次に考えているのが、「小



光照院でおむすびをむすぶひとさじの会



安國寺の本尊に上がった仏供米

さいお寺でも、パントリーができるというモデルケースにしたい」（吉水事務局長）ということ。というのも、吉水事務局長が副住職を務める光照院の境内は、車二台が置けるほどの広さで、それほど広くはない。ここに四畳ぐらゐの倉庫を建てて食料を備蓄し、近所の食べる物に困っている人に渡せるようにしたいという。六月頃の完成を目指している。

「数年前、秋田で無職の兄弟二人が餓死するという事件がありました。相談するところがなかったのでしょうか。コンビニよりも数が多いお寺が各地でパントリーになり、食料を渡すだけでなく、お茶を飲みきたり、相談できる場所になった

ら、このようなことはなくなるのではないのでしょうか。大寺ではなく、うちのような小さなお寺が例を示せた方が、リアリティがあるのではと考えています」

また同会は、全国の寺院に、「フードバンクに施米支援をしてほしい」と呼び掛けている。お寺が取り組みやすい方法として、災害用備蓄米と仏供米の二つの方法を提案している。

まず、災害用備蓄米だが、水やお湯を入れるだけでご飯が炊ける「アルファ米炊き出しセット」をお寺に備蓄してもらおう。五十食分がダンボールに入っていて賞味期限は五年、一箱は一万円程度。これを毎年一箱ずつお寺に備蓄し、幸い災害に遭わなければ、賞味期限が残り一年を迎える時にフードバンクに寄付してもらおう。災害時には近隣の人々の助けとなり、なおかつ、フードバンクに寄付すれば、炊き出しの現場などで重宝される。すでに浄土宗東京教区では、この方法を実践しようと動き出しているという。

関西地方の寺院には「仏供米」を提供してほしいと呼び掛けている。

「関東では廃れてしまいましたが、関西では、お施餓鬼やお十夜に檀家がお米を供える仏供米の風習が残っています。最近はお寺はお金を取るばかり」と感じる檀家さんも多いようですが、お布施が多くの人役に立つということを実感でき、お寺にとっても、お布施の意味を理解してもらえよう機会になるのではないのでしょうか」（吉水事務局長）

吉水事務局長には最近、仏教関係の集まりや大学で、お米支援やフードバンクについて話してほしいという依頼も増えている。様々な質問が出るという。

「最もひっかかるのは、キリスト教の団体がやっているものではないかということ。私も最初はそう思いましたが、実際はそんなことはありませんでした。私たちには古くからお布施としてお米をいただく習慣がありますが、それを必要な所に配送するのは難しい。一方、フードバ

ンクはボランティアで配送を担当してくれます。需要と供給ではありませんが、うまくつながれば、大きな力になるのではないのでしょうか」

仏供米を定着させて寄付する

埼玉県・浄土宗安國寺

仏供米の寄付をすでに実践しているお寺もある。埼玉県越谷市にある浄土宗安國寺だ。庫裡の玄関に「仏供米袋」に入ったお米が積まれている。

町田唯真住職（五十四歳）が四年前に

晋山したとき、法事でお供物に上がるのは、お菓子がほとんどだった。町田住職

仏さまにお供え

お供えの米

お供えの米

お供えの米

お供えの米

お供えの米

お供えの米

お供えの米

お供えの米

お供えの米

お供えの米

お供えの米

お供えの米

お供えの米

お供えの米

安國寺の檀家が仏供米袋に入れて供えた米

「阿弥陀様は正午に一回、お食事を召し上がります。そのためのお米を上げてください。もし、たくさん上がれば、ほかの貧しい方に回すことができるようになります。貧しい方の命をつなぐことになれば、亡くなった方の功德になる。これが、本当のご回向ですよ。と一人ひとりに一生懸命お話ししました。それでみなさんよく理解してくださいました」

米農家の檀家には、お米、それ以外の人は「供米料」を上げて

もらう。毎月、いただいた供米料で近隣の農家からお米を買い、フードバンクやホームレス支援をしている団体などに送っている。供米料はそれらの送料にも使われる。また、お供物として上がる缶詰やジュース、タオルなども、乳児院、養護施設など、必要そうな施設を考えて、振り分けて送っている。

フードバンクに寄付することだけではなく、すでにフードバンクのような役割をお寺が担っているといえる。

さらに、町田住職はもう一つ、アイデアを思い付いた。総本山知恩院では、お米が三合入る「仏供米袋」を作っているが、「檀家三十人と団参に行ったとき、これにお米を入れて持参しました。知恩院に渡すと、きちんとお盆にのせて私たちのために回向をしてくださいました。みんな大感激でした」という。

そこで、自坊でもこれを取り入れることにした。昨年のお盆に知恩院と同じような仏供米袋を作り、本堂の玄関に置い

表① フードバンクに協力している仏教団体や寺院

名 称	これまでの主な活動内容
社会事業委員会 ひとさしの会 (東京都台東区)	全国の浄土宗寺院にフードバンクへのお米の提供を呼びかけている。その際に災害用備蓄米と仏供米を活用。寺院でのフードバンクのモデルも模索中
浄土宗安國寺 (埼玉県越谷市)	檀家に法事のお供物は「仏供米」(お米)をもらうよう呼びかけている。また、お寺参りの際は「仏供米」(お米)を持参してもらい、これを毎月フードバンクに寄付している。次回は滋賀県全体に広がっていく予定だ
浄土宗滋賀教区 甲賀組の青年会	青年会が呼びかけて、「甲賀米一升運動」を展開中。組内寺院(133か寺)からお米を集め、フードバンクに寄付している。次回は滋賀県全体に広がっていく予定だ

表② これまでの主なフードバンク(農林水産省のホームページより)

名 称	設立年	取扱食品	連絡先
セカンドハーベスト・ ジャパン(東京都)	平成12年	食品全般	☎03-3838-3827
フードバンク (東京都)	平成12年	米、その他(缶詰、乾麺、調味料など)	☎03-5850-4863
フードバンク関西 (兵庫県)	平成15年	冷蔵保存、常温保管が可能で賞味期限以内、未開封のもの	☎0797-34-8330
セカンドハーベスト 名古屋(愛知県)	平成19年	ドライ商品	☎052-932-2828
あいあいねっと・フード バンク広島(広島県)	平成19年	多種類の食品	☎082-819-3023
セカンドハーベスト 沖縄(沖縄県)	平成19年	米、パン、缶詰、インスタント食品、レトルト食品など	☎098-853-0001
フードバンクだいち (青森県)	平成20年	農産物など	☎050-3678-3899
ふうどばんく東北 AGAIN(宮城県)	平成20年	常温管理が可能な保存食品	☎022-274-9533
フードバンク山梨 (山梨県)	平成20年	常温管理が可能な保存食品。青果、豆腐類、菓子などの冷蔵品	☎055-282-8798
フードバンク高知 (高知県)	平成20年	米、野菜、レトルト食品、サブシメツ、菓子、調味料など	☎088-875-4751
フードバンク日田 (大分県)	平成20年	米、缶詰、調味料、手作り漬物、冷凍鶏肉、野菜など	☎0973-22-3184

二回目では、洗濯用洗剤五百十九個、台所用洗剤二十六本、せっけん五百八十五個、フェイスタオル二百九十五本お寺で途中まで使ったロウソクなどが集まり、十九カ所の福祉施設に送った。次回は両者を合体させ、規模を大きくしたいというから頼もしい。

「ほかの教区でも、多くの方が関心を示してくださいました。土地ごとの特徴を生かして、各地で広がればいいと思います」(曾田住職)

お寺に上がるお米やお供物を困っている人のために生かす、檀家と一緒に取り組めば、布施行を実感してもらうことにもなる。たしかに、フードバンクはお寺の活動の一つとして、一考してみる価値は十分あるかもしれない。



フードバンクにお米を渡す曾田俊弘住職(右)

如来さまの御宝前にお供えするものでありま
す。ご参詣の節、お供え下さい」と



浄土宗滋賀教区甲賀組の甲賀米一升運動で集まったお米

ある。今では、檀家がお寺にお参りにくるたびに、仏供米袋にお米を入れて、玄関にお供えすることがすっかり定着したという。

「世の中には貧困や孤独の問題など、たくさん問題があります。けれども、お寺の活動は社会のニーズを先に探すのではなく、まず信仰があることが大切だと考えています。たとえば、お念仏会に毎週参加していた一人暮らしの方が急に見えなくなったので、みんなでお宅の様子を見に行く。信仰があるのでおのずと動くというのが、お寺の支援の形だと思っています」と町田住職は話すのだ。

組寺一丸でお米四百五十キロ

浄土宗滋賀教区甲賀組

組単位で仏供米を集めたところもある。

浄土宗の滋賀教区甲賀組だ。滋賀県甲賀市にある、浄土宗浄福寺の曾田俊弘住職(四十一歳)は、「あの世界同時不況で、日本でも貧困問題が深刻化しています。多くの慈善団体が食糧支援に取り組んでいます。でも、お米の確保に苦慮されていると聞きました。ありがたいことに米どころの滋賀では、たくさんのお供米のお下がりをちよだいする恵まれた立場にあります。これをおすそ分けするべきだと考えました」と話す。

そこで、甲賀組の青年会は「甲賀米一升運動」を展開した。昨年末、組の全百三十三カ寺にお米の提供を呼び掛けたところ、今年一月十日(二十五日の募集期間に、お米が四百六十キロと、野菜、お茶、海苔、調味料などの食品が百キロも寄せられた。お米は一カ寺平均、二升以上の計算だ。これを「フードバンク関西」(兵庫県芦屋市)に引き取りにきてもらった。この甲賀米一升運動に、次回は滋賀教区全体が協力してくれることになった。